

国内活動部門
グラウンドワーク三島

缶ビール片手にどぶ川を救う



源兵衛川での清掃活動
(グラウンドワーク三島提供)

表彰の2団体

国内活動部門で受賞したNPO法人「グラウンドワーク三島」は、静岡県三島市で環境改善活動を30年以上にわたって続ける。その活動は、富士山の湧き水が流れる三島駅近くの清流、源兵衛川の保護から始まった。今や夏に1日1千人の子供が遊びに訪れ、夜には蛍が舞うこの川も、かつては開発や生活排水の流入、ごみの投棄などで誰も近づきたがらない「どぶ川」だった。一時は行政による埋め立て計画も浮上したが、地道

な清掃活動を続けながら年200回の住民説明会を開き、独自の再生計画を立案。地域の有力者を巻き込んで決定を覆し、「水の都」の原風景を取り戻した。「右手にスコップ、左手に缶ビール」を合言葉に活動の重点を現場に置く。渡辺博専務理事は「痛風になったので今は焼酎。胃と肝臓で活動をまとめ上げた」と豪語する。渡辺氏は大学卒業後、静岡県庁に就職。恰幅のよい見た目からあだ名は「ジャンボ」。勤続十数年目のあ

教育や環境保全、医療などさまざまな分野で社会貢献に取り組む団体を表彰する第29回「地球倫理推進賞」(一般社団法人倫理研究所主催、文部科学省・産経新聞社など後援)に2団体が選ばれ、3月29日に東京都内で贈呈式が行われた。受賞2団体の活動を紹介する。(荻野好古)



東ティモールでの移動診療
(シェア=国際保健協力市民の会提供)

地球倫理推進賞

国際活動部門で受賞したNPO法人「シェア=国際保健協力市民の会」は「すべての人々が健康に暮らせる世界」の実現を目指し40年以上、アジアやアフリカで保健支援を続けている。発展途上国では、首都と地方で受けられる医療レベルに大きな格差があることが多い。シェアは、誰もが地域に根差した保健医療サービスを受けられる「プライマリ・ヘルスケア」の理念に基づき、僻地や農村部などを中心に活動。栄養改善や予防接種といった支

援だけでなく、地元の医療従事者や保健ボランティアの育成、学校での保健教育などに注力する。「お前たちはもういない。俺たちでできる」。そう言われるようになることが理想だと仲佐保・代表理事は語る。仲佐氏は外科の研修医時代にカンボジアの難民キャンプで医療支援を経験。帰国後、志を同じくする仲間とシェアを立ち上げた。だが、最初の支援先のエチオピアで未熟さを痛感。栄養失調で次々と命を落とす子供たちを前に、日本か

国際活動部門
シェア=国際保健協力市民の会

すべての人に健康な暮らしを

る夜、子供のころ遊んだ川の光景にぎよっとした。干上がった川辺に並ぶ生首のようなものに目を凝らすと、それは無数のごみ袋だった。以降、毎朝一人でごみを拾っては、車で作業着からスーツに着替えて県庁に向かう日々が始まった。その愚直な姿に共感した地域住民の輪が広がり、グラウンドワークに発展した。諸外国に比べ、日本ではNPOなどの社会貢献活動に携わる人間が少なすぎる。とジャンボは吠える。「街は誰のものか。市民のものだ。街が汚いのは市民のせいだ。住民サービスを自分たちで行えば、税金も行政マンも半分で済む」

ら持ち込んだ先端医療は無力だった。地域にはびこる慢性的な食糧難。一時の支援で解決できる問題ではないとの気づき、持続可能な保健医療というシェアの姿勢につながっている。40年前と同様に格差や感染症、戦争の脅威が続く現代。仲佐氏は「これまで国際協力は常識だった。『すべての人』のために一緒に動くんだと。それが『自分の国さえよければ』と平気で言われるようになってきた」と国際協力の退潮を危惧する。そして「私たちは、これまでやってきたことを地道に続けたい。今だからこそ」と決意を語った。